

「成果報告書」に記載された意見・感想（個人情報および研究情報が漏れることのないよう一部編集しています）

制度利用研究者
○ 成分分析・解析など支援員の知識・技術を使わせてもらった。 自分の時間を補充できたため、出張や実験などその他業務に従事することができた。 欲を言えば、論文投稿を増やしたい。今後は支援員と相談しつつ、時間確保のための充実化を検討し、業績・研究費を増やせるサイクルをめざしたい。
○ 妻の年間平均論文数がコンスタントに1報以上は発表することができており、夫婦関係が寛容になった。 夫婦ともに十分な研究時間が確保でき、子育てと両立できていると考えている。
○ 昨年度から制度を継続利用しているが、制度利用によりデータ処理がスムーズに進むため、学会発表への意欲が増した。また、今年度は論文投稿や学会発表が増えたため、学会における講師依頼が多くなった。このほか、数年来の懸案事項であった学位論文の提出に至った。 制度利用により日常生活との両立ができているが、学会参加など宿泊を伴う業務が増え、子どもを連れて行くために保育する人の旅費も必要であるため、経済的にも子どもにとっても良い環境ではないと感じている。「ワークライフバランスをいかに取るか」が自身の課題である。
○ 前年度より引き続き制度利用している。実験のサンプル収集とデータ分析・まとめに集中することができ、現在は論文作成に着手している。 育児もあり研究時間の確保が困難であったが、支援員にサンプル分析を依頼することで、効率よく研究活動が進み、生活の両立も可能となっている。
○ 学会発表に伴うデータ整理や倫理審査の書類整理作成を支援していただき、他業務に関わる研究指導に兼ねることができた。
○ お腹の子のことを考えると避けたい薬品の使用・実験があっても、研究が進まないため不安に思いながら実験を続けてきた。 制度利用して、初めて「手伝ってもらえないか」とお願いし、とても助かった。 対照的かつ共通点もある研究をしている支援員において、自分の実験結果をさらに吟味する視点を提供できたのではないと思う。 初めての制度利用だったため、制度利用におけるアイデア集のようなものがあれば、自身の仕事の効率化にもつながると思う。
○ 支援員を配置したことで、分業により作業時間が短縮できたため、作業の効率化が図れた。今後も継続的なデータ集積を行うことで、論文投稿等につなげていきたい。 また妊娠・出産前に比べると、圧倒的に時間・体力がなく、その他の業務にも時間をとられており、なかなか業績としてまとめることができていない。
○ 制度利用前は、学会発表に行くことさえ考えられない状況だったが、利用後は計画的に研究時間を確保することが可能となり、学会発表をしようという意欲がわいた。また、教育面での業務をこなすだけでなく、研究に対するモチベーションも上がった。 日常生活との両立もできつつあるが、もう少し研究時間を増やしたい。
○ 制度を利用して、自身の実験に割く時間を減らせた代わりに、大学院生への指導に時間を割くことができるようになった。 また、自身も論文を予定より早く投稿でき、受理された。 業務と生活のどちらも満足のいくレベルにはまだ努力が足りないが、おおむね満足である。
○ 制度利用によりこれまで以上にデータ処理が進み、今年度中の論文投稿に向け大きく進展した。 支援がなければ、今年度中の論文投稿は念頭になかったが、現段階では目標達成が可能であると思う。 今回、研究支援員の助けをいただけて、本当にありがたく思った。さらに業績をあげられるよう努力したい。
○ 制度を利用して、学会発表の準備もできるようになった。そのため、学会へ参加するようになった。 業務を一定の時間内に効率よくこなせるようになった。
○ 今期はデスクワーク中心の支援だったが、今後は支援員といっしょに実験をする予定である。 保育園が利用できる日は、土曜日にも研究を行っており、現実的にはこのような日が最も実験がはかどるため、支援範囲にいられていただければと思っている。 また今期は、当初の予定よりも家族の協力が得られ、家事の負担が減少したため、業務との両立がスムーズだった。
○ データ入力の時間が確保できず研究が進みにくかったが、参考文献の和訳してもらったため、論文作成が進んだ。 今回、(支援員が)学部学生のため支援内容は限られたが、知識は得られたと思う。 また、学生のため夏休みや授業の関係で、支援時間は少なかった。
○ 制度利用前は英語論文を読む時間がなく、論文作成のための資料を用意することが困難であったが、利用後は、論文要約をしてもらうことにより論文作成の時間を短縮できた。実験技術のある大学院生などを配置できると、なお助かる。 業務と生活の両立については、両親の援助のおかげで、残業したり遅くに開催される会議に参加できている。

## 研究支援員

- 自身の研究活動や修士論文作成にも活用できる知識や手技を学んだ。  
複数の方法を学び、自身の目的に合った測定方法を選択する重要性を学んだ。  
今回の経験を活かして、多くの研究成果を出し、学会発表を行おうという意欲が出た。
- 前年度より研究支援員に継続従事していたため、前回よりスムーズに作業を行った。  
また分析では、今までの自身の経験を活かすことができ、さらなる新しい知識を得ることができた。
- 昨年度から同じ先生の支援に従事し、以前よりもミスが少なく作業のスピードが速くなるなど、慣れてきていると感じる。  
予想通りの結果が出ない際に、先生は原因を考え、さまざまな角度からアプローチする姿が印象的だった。
- 支援を通して先生方から直接ノウハウを教えていただき、多くのことを学ぶことができるため、支援員としての機会に感謝している。大学院進学も考えるようになった。
- 研究者である先生の仕事の一部を担うことができ、貴重な経験となった。ひとりの研究者を目指す大学院生としても、実際に一部の役割を担当することでどのようなものか理解し流れを把握でき、次の機会へ活かすことのできる学びの場となった。
- 前年度までの従事時間よりも短くなってしまった支援時間の関係で、実験を途中までしか行えないことがあり、業務が半端になる時があったため、不十分さを感じることもあった。
- 自分の研究分野とは異なるカテゴリだったが、他分野の研究に触れることで、新しい視点から自身の研究を見直す良い機会となった。  
支援業務のなかで、一見関係のないようにみえるデータや文献も、熟知熟読することで自身の研究に活かせる部分が数多くあることに気づかされ、思考の幅を広げるよい経験となった。
- 今回の（研究者の）研究には、自身の実験と共通点があり、これまでの経験を実験に活かすことができた。一方で、これまでとは異なる分野の研究は、自身にとって新しいものであり、実験方法や検討方法など、これからの自身の研究に活かせると考えている。また今回の経験を通して、他分野の研究への知識を深めることができた。
- 支援を通して、自身の研究での実験操作や測定の原理、後処理の大切さを学ぶことができた。前処理作業や実験操作については、技術の向上を感じた。  
内容物未知試料の測定では、内容物が何で構成されて元は何であったかがわかり、その処理の仕方まで学ぶことができた。
- 外国語新聞や雑誌の読解、外国語資料の取り寄せ、外国人研究者との連絡などを行った。  
研究支援を通じて、資料取り寄せ方法が身に付いた。研究の流れについてイメージできたため、自身の論文作成に活かすよう努力したい。
- これまでにしたことのない作業で、パソコンを用いて共焦点データを解析した。  
大学院に進学することも将来の選択肢として考えているので、今回の支援業務（データ解析の方法）は、将来に活かそうと思った。
- エクセルを用いて色素についての研究や実験結果を整理するというデスクワークが主で、研究そのものの手伝いではなかったが、データ整理能力が身についた。  
また、関係論文の和訳・要約をしたため、論文の読み方を改めて学べた。  
今後も、もっと研究に携わりたいと思っている。
- 支援するなかでその研究分野への関心が高まり、わからないことについて積極的に疑問への追及ができるようになった。  
また、臨床および研究もされている先生のもとで支援できたことは、自身の将来を考えるうえで参考になった。  
他のアルバイトに比べ、研究支援員の業務は知的好奇心がそそられ、充実した時間を過ごせた。  
機会があれば、また支援員をしたいと思った。